

「復活の望みに生きる」

使徒行伝 23章 1節～10節

説教 本庄侑子牧師

洗礼を受けて教会に連なるキリスト者は、ある生き方へと導かれます。どのようなときも喜びが奪われず、与えられた命を天に向かって燃やすという生き方です。地上の人生が、ただそこでだけで完結するのではなく、天にある復活の望みのもとに置かれているからです。

パウロは逮捕され、裁判にかけられるため、ローマへ移送されていきます。人々の自己保身、策略により、裁きの場へ引きずり出されます。これまで、3回にわたる旅によって実りある働きをしてきました。しかし今や、身柄を拘束され、無力な自分を嘆くしかありません。この姿は、私たちが代表しているようです。年を追うごとに、かつてのように働けなくなります。願ってもいない鎖につながれることもあります。

そういう状況で、パウロはある望みを見つめさせられました。自由に働けた時も、無力な自分を嘆くしかない時も、自分を導いているのは一つの望み。死から復活されたイエス・キリストと結び合わされていて、神様の力の働き場とされているという望みです。

休暇中、日本基督教団函館教会で礼拝を守り、遺愛女子中学校・高校の創立記念礼拝に出席しました。函館教会は、大阪教会と同じく、今年146周年を迎えます。146年前はキリシタン禁制の高札の撤去から間もない頃で、函館で外国人が殺害されるという事件も起こりました。それでも、ハリス宣教師夫妻は函館にとどまりました。ハリス婦人は、日本で女子教育の必要性を母国に訴え、それを聞いたアメリカ人女性の献金によって、上記の学校は創立されました。その女性は、娘を病で失い、娘の教育資金にしようとしていた財産を献げたのです。

外国人に敵意が向けられる中で、最愛の娘の喪失という絶望や悲しみの中で、復活の望みに支えられ、天へと続く道を歩いていった人たちがいたのです。私たちも、この道を歩いているのだと励まされて帰ってきました。

主イエスが地上にお生まれになり、人として生きてくださったこと、地上で語られた言葉や行われた愛の業、私たちの罪を背負い、十字架上で死んでくださったこと、それらは確かに私たちの心を捉えます。しかし、主イエスの復活こそが、こ

れらすべてを支える土台なのです。主イエスは、罪と死、不条理を引き受けて死に、三日目に死人のうちから復活されました。世の終わりまで、この地上にある罪と死、不条理の中に深く関わり続けてくださいます。

私たちの人生は、地上の営みだけを見つめるのではなく、死から復活された主が、あらゆる苦難や喪失の出来事にあっても力を発揮してくださり、終わりの日には完成に至らせてくださるからです。地上の営みに苦しみがあっても、絶望しなくてよくなった。人生に大きな損失と思える出来事があっても、そこで全てが終わるのではなく、無事に嘆くしかない時も、死においても、その私たちに天からの力が働いて、主ご自身が救いの完成に至らせるため、仕上げをしてくださるからです。

パウロは、ローマ市民、ユダヤ人でしたが、自分は神の国の市民であるを知っていました。神は、敵意を向ける人も含め、全ての人のために御子を十字架につけ、愛と憐れみを示してくださいました。自分はこの神の保護のもとにあり、このお方の御心に従うのだと宣言しました。

パウロが相対していたサドカイ派は、復活、天使、霊を否定する人たちでした。この世のものだけに目を向け、そこで完結していました。この地上での幸せを得るため、マイナスに見えることをプラスにするためだけに、命を燃やしていたとも言えるでしょう。パウロは、復活の望みを証しせずにはいられませんでした。復活の望みにあっても、自分が考える幸せを手に入れることだけがすべてではありません。たとえ手に入らなくても、その人生は失敗ではありません。そこに主が働いておられ、永遠の意味が与えられます。

パウロの訴えはしかし、人々の心を素通りしました。彼はローマに移送されていきます。人々の悪意、自己保身や策略がパウロを追いやっていったように見えました。しかし、この時前進していたのは、パウロをローマに遣わすという神様の御心でした。この時も、主イエスの復活の力はパウロの人生に働いていました。今週も、この復活の主が私たちと共におられます。

(記 説教要約奉仕者)